

妻は認知症魔の深夜

介護家族



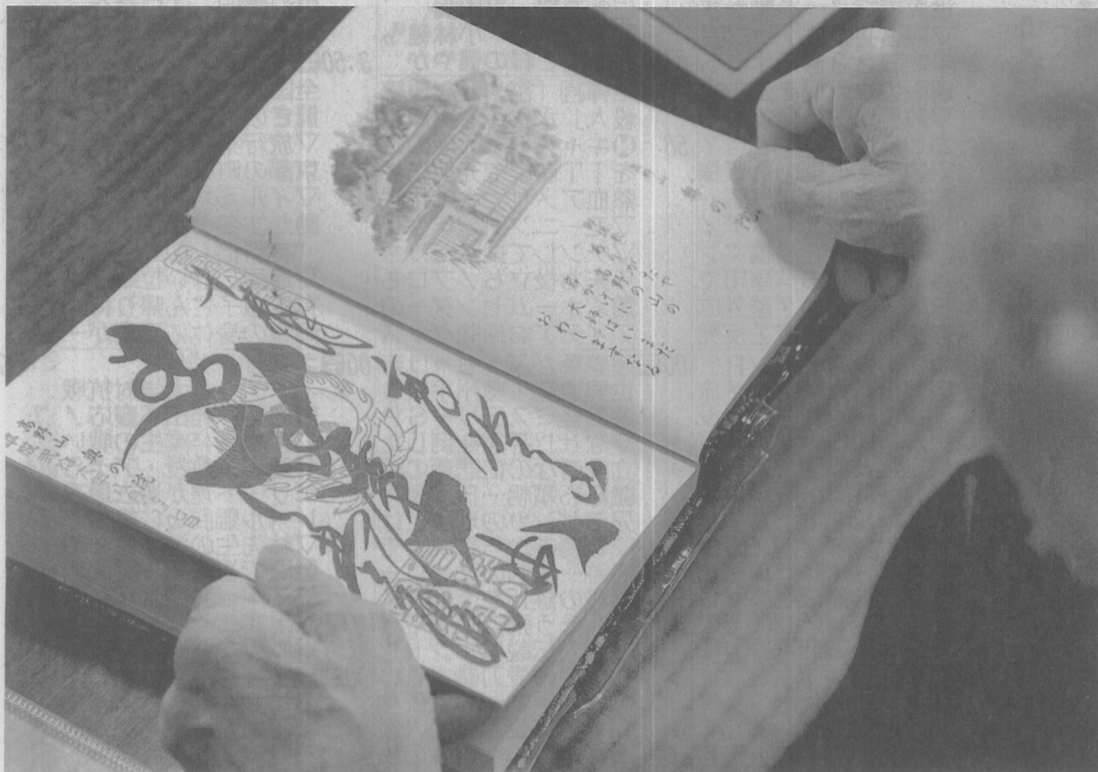
殺人事件の「告白」

1 (1面参照)

午前2時を過ぎ、街はずっかり寝静まっていた。2012年8月中旬だった。兵庫県姫路市の男性(78)は認知症の妻(当時71歳)を助手席に乗せ、行く当てもなく車を走らせた。寝不足のために頭がぼーっとしていた。ハンドルを握りながら、暗闇に浮かび上がる姫路城を眺めたり、姫路港の先に広がる漆黒の海を見つめたりした。妻は目をつむって、うつうつとしている。

午前8時半、デザイナーピスの迎えに訪れた施設職員が異変を感じた。駆けつけた息子が遺体を見つけた。男性も近くに倒れていた。睡眠薬数十錠を酒と一緒にのみ込んでいたが、助かった。翌日に退院し、殺人容疑で逮捕された。手錠をかけられてようやく、47年も連れ添った妻の死、そして自分が手をかけた現実を認識した。神戸地裁姫路支部は13年

不眠ドライブ 1カ月の末



2月、男性に懲役3年、保護観察付きの執行猶予5年(求刑・懲役5年)を言い渡した。判決は介護疲れが事件の引き金だと指摘した。「妻が深夜から早朝にかけては

ほとんど寝付かない日が続く中、妻を車で連れ出すなど献身的な介護を続けた。身体的、精神的疲労は相当多大に蓄積されていた」

「お母ちゃんを殺した時の記憶はほとんどない。ただ、自分の中の大きな何か

男性は妻を供養しようと霊場巡りを続ける。納経帳(のうきょうちょう)には各札所の朱印が押されている—兵庫県姫路市で10月8日、加古信志撮影

が崩れた。もうこれで終わろう。自分もあの世に行こうと。それだけだった」この秋、男性は取材に応じ、重い口を開いた。

「殺してしまつて、ごめん。成仏せよ」今年9月16日昼、兵庫県宝塚市の中山寺。秋風が吹き始めた西国巡礼第二十四番札所で、男性は両手を合わせて妻に語りかけた。

153回目の祈りだ。妻を供養しようと、四国八十八カ所と西国三十三所の霊場巡りをしている。男性は兵庫県明石市で1937(昭和12)年、父親が国鉄職員の家庭に四男として生まれた。中学を卒業して時計職人になり、姫路市の時計店に就職した。

知人の紹介で出会った妻と28歳で結婚した。姫路市内にマンションを買い、3人の子宝にも恵まれた。休

まずに働いた。帰宅後も時計の修理に没頭した。「仕事はすっかりで、家庭をほったらかしにしていた」98年に定年を迎え、妻に恩返しをしようと思った。近くの観光地を巡るため、退職金全額の100万円を車を初めて買った。

新聞配達のアパートで費用を稼ぎ、妻と北海道や石垣島を旅行した。中国やカナダにも連れて行った。しかし、楽しみは続かなかった。09年ごろ、妻の異常な行動が目についた。意味もなくタンスの引き出しを開閉したり、使わないアイロンを用意したりした。今思うと、認知症の兆候だった。しばらくすると、症状は急激に悪化した。

介護疲れによる殺人や心中がなくならない。在宅介護の担い手に何が起きているのか。シリーズ企画「介護家族」で介護社会の現実を追う。(今回の連載は計6回予定。向畑泰司、渋江千春、前田幹夫が担当します)

特養待機26万人

介護が必要な高齢者を支える介護保険制度が2000年4月に導入されたが、支える人手や施設は足りていない。厚生労働省によると、自宅での生活が難しい人向けの特別養護老人ホームに申し込んだ在宅の要介護者のうち、13年10月時点の待機者は約26万人。介護保険制度は市町村の要介護認定を受けた65歳以上(特定疾病患者は40〜64歳も対象)が在宅か施設でのサービスを受けられる。費用負担は1割(一定所得以上は2割)。

ご意見や体験を

ご意見や体験をお寄せください。郵便は〒530-8251(住所不要)毎日新聞社会部「介護家族」取材班▽メール(o.sha.kaiibu@mainichi.co.jp)▽ファクス(06-6346-8185)